

2021～2022年度なにわ大阪研究センター公募研究班

甘檜丘遺跡群の基礎的研究

— 発掘調査の成果を中心に —

研究代表者 井 上 主 税

研究分担者 西 本 昌 弘 長谷川 透

要 旨：甘檜丘遺跡群の発掘調査を通じて実施した研究の成果として、蘇我氏の邸宅と関連する遺構（飛鳥時代前半期）は確認できなかったが、乙巳の変後、飛鳥時代後半を中心とする大規模な造成跡と土地利用の状況を確認したことが挙げられる。

キーワード：甘檜丘遺跡群、土地利用、建物跡、飛鳥時代後半

1. 研究概要

2021～2022年度なにわ大阪研究センター公募研究班として、標記の研究課題に取り組むこととなった。

飛鳥（現在の奈良県高市郡明日香村）に所在する高松塚古墳は、本学名誉教授の網干善教氏により1972年に発掘調査が行われ、極彩色の壁画が発見されてから2022年で50年を迎えた。飛鳥は古代の都が置かれた地であり、飛鳥時代は律令国家形成期としてさまざまな諸制度が発足した。この時代の実像は、宮殿跡や飛鳥寺や川原寺跡などの古代寺院、中尾山古墳や高松塚古墳といった終末期古墳の発掘調査を通じて明らかになってきた。文献史学では、『日本書紀』や『古事記』などの史料や遺跡から出土した木簡を対象に研究が進められてきた。

このように、飛鳥には多くの歴史的遺産が所在することは周知の事実であるが、飛鳥川の西岸に位置する甘檜丘^{あまかしのおか}もまた歴史的遺産の一つであり、『日本書紀』皇極天皇3年条には蘇我蝦夷・入鹿の家（邸宅）が甘檜丘に並びたっていたと記されている。この丘の東麓では、これまで奈良文化財研究所によって9次にわたる発掘調査（甘檜丘東麓遺跡）が行われ¹⁾、7世紀中頃の焼土層や7世紀の掘立柱建物等の遺構が確認されており、これらの遺構が蘇我氏の邸宅の一部ではないかと推測された。

2020年度から明日香村教育委員会と本学考古学研究室の共同調査（甘檜丘遺跡群）が実施されており²⁾、2024年度までの5か年にわたる発掘調査では、建物などの関連施設の検出や整地の範囲の解明などが期待されている。飛鳥時代の邸宅の様子を知りうる資料は少なく、この遺跡の解明はそ

の手がかりとなり得るものである。また発掘調査を通じて、飛鳥時代に朝廷の実権者として権勢をふるった蘇我氏一族に関する資料が確保されれば、飛鳥時代の研究においては非常に大きな意義をもつ。

本研究では、この甘檜丘遺跡群を対象とし、発掘調査を通じて得られた資料のほか、『日本書紀』などの文献史料にみられる記録などをもとに、本遺跡の性格や歴史的な意義について考察することを目的とする。また、これらの資料をもとに、本学で考古学研究室を中心にこれまで進めてきた飛鳥研究をさらに発展させることが期待できる。そして、発掘技師や学芸員などの専門職への就職を希望する学部生や大学院生が今回の発掘調査に参加することで、現場経験を積むことができ、教育面における貢献も大きいと考える。

以上の研究課題に対して、ここでは2022年度下半期に実施した甘檜丘遺跡群の発掘調査の成果を述べ、そのうえで2021年度・2022年度に実施した発掘調査を通じた研究成果のまとめと今後の課題について述べる。

2. 2022年度甘檜丘遺跡群の発掘調査

2022年度は、2021年度調査³⁾の4区を拡張した本調査区と本調査区の北側に拡張区を設定した。本調査区は、東西15m、南北14m、拡張区は東西3.5m、南北8mに設定し、調査総面積は240㎡である。

本調査区と拡張区は、南向きの傾斜が緩い小さな谷に立地する。遺構の検出は、谷を埋め立てた造成土上面でおこなった。遺構検出の結果、本調査区では総柱建物、石列、柱穴、土坑、炉跡、焼成遺構、木棺墓、砂溝、素掘溝を、拡張区では砂溝と土坑を検出した(写真1)。

以下、検出した各遺構、出土遺物について報告する。

(1) 検出遺構

総柱建物 本調査区の西側中央付近で検出した総柱建物は、南北3間、東西2間以上の規模をもつ。柱掘形の規模は、一辺が約85～110cmで、大きいもので130cmを測る。掘形の深さは約60～95cmとばらつきがある。柱間は掘形芯々で南北約180cm、東西約210cm。柱は1基だけ木柱が



写真1 本調査区 全景(南東から)

遺存しており、木柱の径は10cm以上である。柱掘形には人頭大の石を根固めのために数個入れ、掘形底面には根石のために拳大から人頭大の石を敷き詰めていた。柱抜き取り穴から7世紀後半の須恵器が出土した。

石列 本調査区の北側と南側において東西方向に延びる石列2条を確認した。以下、北側の石列を北側石列、南側の石列を南側石列と表記する。北側石列は約25cm大の横長の石を北側に面を揃えて並べる。横長の1石を立てて東西方向に石の長辺を揃えて一列に並べるが、調査区中央付近で北に向かって長さ約1.1mにわたって折れ、そこから再び西側に折れて延長する。南側石列は、約25cm大の横長の石を南側に面を揃えて並べる。北側石列同様の並べ方だが、石の並びや面の揃え方は北側に比べやや雑な印象を受ける。南側石列の東端付近の2石分だけ、他の石材とは異なる天理砂岩が当て嵌められている。この石列は何らかの区画施設であったと考えられる。

炉跡 本調査区中央付近で確認した鍛冶炉である。約50cm大の粘土を土手状に巡らし、その内側に高温で赤変した焼土が厚さ約7cmにわたり不整形に広がる。この焼土は西側に向かって傾斜しながら受け口状に広がるが、そこに鉄滓が多く絡んでいた。鍛冶操業に伴う排滓口を西側に設けていたものとおもわれる。鞆羽口や炭は認められず、炉の上部構造は削られて残っていない。

焼成遺構 本調査区の南側東寄りで確認した焼成遺構である。この遺構は貼床粘土の東縁中央に位置する。貼床粘土は黄橙色の山土を厚さ2cmという一定の厚さで敷き均したもので、その範囲は約3.5m四方に広がる。焼成遺構は、この貼床粘土の上面に約40cm大の範囲に広がり、赤変した焼土の上には炭が被っていた。この中から何らかの操業を示す遺物は認められず、操業内容は不明である。貼床粘土の存在を考えれば、この焼成遺構は煮炊き用の竈であった可能性がある。また、貼床粘土の下から7世紀後半頃の土器が出土したことから、飛鳥時代後半以降の施設であったと考えられる。

土坑 本調査区南壁西寄りで確認した土坑である。平面形態は不整形を呈し、最大辺で76cmを測る。深さは約40cmで、土坑内から須恵器の平瓶と高杯が出土した(写真2)。平瓶は正位置に据え置かれるが、平瓶の上には開口する口縁に蓋をするよう平らな天理砂岩が置かれていた。平瓶内には粘土が溜まっていたが、遺物などの内容物は認められなかった。また平瓶の横では



写真2 本調査区 土坑内出土状況(東から)

杯部を下に向けた高杯が出土した。

木棺墓 調査区の北壁の東側付近において検出した木棺直葬墓である。墓壙は長さ235cm、幅85cm、残存する深さは30cmである。墓壙内から鉄釘が約38本原位置を保った状態で出土したことにより、木棺の大きさは長さ210cm、幅は北側で50cm、南側で40～45cmである。鉄釘は平均して長さ10cm、厚さ0.7cmと小型である。墓壙の南側底部では黒色土器椀が伏せられて状態で出土し、これによりこの木棺はおよそ10世紀頃に埋葬されたことがわかる。

砂溝 調査区の中央付近に南北方向に1条、それにとりつく東西方向の素掘溝である。溝の規模は幅約70cm、深さ約50cmで、断面形態は箱形である。溝埋土は硬く締まった荒砂で、土砂が大量に流れて埋没したとみられる。埋土から奈良～平安時代頃とみられる水差しの把手片が出土した。

(2) 出土遺物

調査区及び拡張区では、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、瓦、鉄釘、鉄滓、不明金属器が出土した。

(3) 調査成果のまとめ

今回の調査によって、甘樫丘に取りつく南向きの小支谷において、飛鳥時代から古代にかけての土地利用の変遷を確認することができた。検出した遺構の変遷は現段階で次のとおりである。谷の埋め立て（造成開始時期不明）→北側石列→総柱建物・南側石列→柱抜き取り（7世紀後半頃）→土坑→貼床・鍛冶操業→砂溝（奈良～平安時代）→木棺墓（平安時代）。なお、石列および総柱建物については、調査区外に広がることが確実であり、さらに遺構の前後関係を明らかにすることが今後の検討課題である。

3. 成果の公表

2021年度および2022年度の調査成果については、出土資料の整理・分析作業中であるが、概報、展示会や図録、講演会（成果報告会等）で発表している。

【概報】

長谷川透 2023「(2) 2021-3次 甘樫丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和3年度』明日香村教育委員会

長谷川透 2024「(1) 2022-1次 甘樫丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和4年度』明日香村教育委員会

【展示図録】

長谷川透 2022「甘樫丘遺跡群」『大和を掘る37』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

長谷川透 2023「甘樫丘遺跡群」『大和を掘る38』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

長谷川透 2023「甘樫丘遺跡群」『飛鳥の考古学 2022』飛鳥資料館

【講演会】

井上主税 2023「蘇我氏の栄華、蘇我四代の軌跡をたどる」『第182回 奈良学文化講座』於奈良県社会福祉総合センター

井上主税・西本昌弘・長谷川透 2023「甘樫丘遺跡群の基礎的研究——発掘調査の成果を中心に——」

『なにわ大阪研究センター研究成果報告会』 於関西大学

4. まとめと今後の課題

以上、2021年度および2022年度の甘櫛丘遺跡群の発掘調査を通じ実施した研究成果を報告した。期間全体の研究成果として、発掘調査では蘇我氏の邸宅と関連する遺構（飛鳥時代前半期）は確認できなかったが、蘇我本宗家が滅亡した乙巳の変後、飛鳥時代後半を中心とする大規模な造成跡と土地利用の状況を確認したことが挙げられる。2022年度の調査で検出した総柱建物は南北3間、東西2間以上の規模で、柱掘形は大きいもので130cmを測り、大型の倉庫である可能性が高い。甘櫛丘については、文献史料から飛鳥時代前半期の様子は一部知られているが、飛鳥時代後半期以降はよくわかっておらず、今回この時期に関する重要な知見を得たといえる。また、発掘調査では飛鳥時代前半の遺物も出土していることから、周辺には飛鳥時代前半頃までさかのぼる遺構が展開する可能性も考えられる。

2023年度以降は、なにわ大阪研究センター公募研究班（「甘櫛丘遺跡群の変遷と土地利用に関する研究——発掘調査の成果を中心に——」）として、引き続き発掘調査を実施して、甘櫛丘遺跡群に関連する研究を進める予定である。

謝辞

本研究は、2021～2022年度関西大学なにわ大阪研究センター公募研究班において、研究課題「甘櫛丘遺跡群の基礎的研究——発掘調査の成果を中心に——」として研究費を受け、その成果を公表するものである。

註

- 1) 大林潤・若杉智宏・清野孝之・和田一之輔 2014「048 甘櫛丘東麓遺跡の調査 第177次」『奈良文化財研究所紀要2014』奈良文化財研究所など
- 2) 長谷川透 2022「2020-5次 甘櫛丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和2年度』明日香村教育委員会
- 3) 長谷川透 2022「甘櫛丘遺跡群」『大和を掘る37-2018～2021年度発掘調査速報展-』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
長谷川透 2023「(2) 2021-3次 甘櫛丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和3年度』明日香村教育委員会

(いのうえ ちから 関西大学文学部教授)

(にしもと まさひろ 関西大学文学部教授)

(はせがわ とおる 明日香村教育委員会文化財課係長)

